

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12241

研究課題名（和文）ルネサンス美術の宗教的機能：カトリック改革派カッシーノ修道会の信仰とパトロネージ

研究課題名（英文）Religious Functions of Renaissance Art: Faith and Patronage in the Cassinese Congregation

研究代表者

百花草 真理子 (YURIKUSA, Mariko)

東京藝術大学・大学院美術研究科・研究員

研究者番号：80813188

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、15世紀末から16世紀前半に北イタリアを拠点としてイタリア全土にネットワークを持ったベネディクト会系改革派カッシーノ会に着目し、カトリック教会の刷新を内部から試みた同会の芸術実践に基づき、各作品の宗教的機能・目的を照射するとともに、その機能・目的のもとに、それぞれの芸術家の創意や絵画様式がいかに関わっているかを明らかにした。多様な表現形式を地域性ではなく、この時期のイタリアにおけるカトリック改革派の文脈へと位置づけることにより、ルネサンスという現象を特定の都市の文化や芸術によって捉えてきた従来のイタリア絵画史の枠組を相対化し、16世紀の宗教画の機能や価値を再考することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未だ包括的な調査がなされていないカッシーノ会と彼らの注文によって制作された美術作品について、北部イタリアに位置する修道院を中心に調査・考察を行い、イタリアの人文主義や北方の宗教改革とも密接に関連する彼らの宗教性と芸術的取り組みの一面を明らかにした。本研究の意義は、各地域における同会の宗教的／芸術的実践を16世紀イタリアの宗教的コンテクストに照らして体系的に捉えたことで、対抗宗教改革以前にカトリック陣営でなされた美術に関する理解を進展させ、礼拝的機能と芸術的革新との関わりをめぐる近年の美術史学の議論を考察するための一つの視点を提示した点にある。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to clarify functions of art works produced in the first half of the 16th century by the Cassinese Congregation, a Benedictine reformist group. By considering the religious purposes of each work in the context of this Congregation, the contribution of each artist is illuminated. These results provide an indicator for re-examining the discussion regarding the role and meaning of religious paintings in Renaissance Italy.

研究分野：美術史学

キーワード：イタリア・ルネサンス ベネディクト会 カッシーノ会 カトリック改革 宗教改革 聖堂装飾

1. 研究開始当初の背景

本研究のテーマ設定の背景には、近世への転換期とされる16世紀初頭の宗教画がいかなる機能・価値を備えていたかという文化人類学的問いがある。従来の歴史観においては、この時期の宗教画について、「礼拝」から「芸術」の対象へと、その機能の変化が単線的に捉えられてきたが、それは一部の絵画のみを対象にした見方であり、イタリア・ルネサンス美術全体を包括的に展望するものではない。この捉え方は、「地方」を排除し「中央」の文化現象にのみ光を当てた従来のルネサンス研究の問題点とも連動する。近年では、こうした束縛や偏向からの脱却を試みる取り組みの一環として、特に北イタリアの芸術文化に注目が集まり (Periti, 2004; Steinhardt-Hirsch, 2008; Switzer, 2012)、中央イタリアとは異なる宗教美術のあり方が指摘されるが、これらは逆に北イタリアの地域研究の領域に留まる。カトリック改革の気運が内外で高まっていた時代背景を鑑みれば、15、16世紀のイタリアには地域を越えて改革を推進しようとした人々による共通の精神的基盤があり、そのもとで美術作品が注文・制作されたという可能性を考慮する必要があるが、この方向からの美術史的考察は不足し、対抗宗教改革以前の改革運動と美術との関係について具体的な様相は殆ど明らかにされていない。申請者は、研究開始時点において、北イタリアのエミリア地方に位置するパルマのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ修道院を対象とした研究により、聖堂交差部に描かれたコレッジョの天井画および壁面装飾について、観者の動的視線を利用した画家の手法を明らかにし、その革新的な芸術様式が、同修道院の属するベネディクト会系改革派カッシーノ会の修道実践に寄与するプロセスに光を当てた。これらの論考をまとめた課程博士論文では、個別の作品研究に留まっていたため、取り扱う研究対象を他の修道院や芸術家へと拡大して発展させ、カッシーノ会の美術と芸術家の実践を体系的に理解する必要があった。北イタリアにおける他のカッシーノ会の芸術実践の具体的な様相を把握し、それらをトスカーナ=ローマを軸とした16世紀のイタリア美術史に組み込むことで、上記の、1545年以前の教会改革という文脈において、いかに礼拝的価値を高めるためにルネサンス芸術家が関与し、宗教画を成り立たせていたかという問いに対する一視点を提供できる可能性があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、とくに歴史的な位置づけが曖昧なトレント公会議以前のカトリック美術について、その様態、機能、展開を捉えるための基礎を構築することを目的とした。その方法として、各地域の流派に分類する従来のルネサンス美術史の枠組みのもとでの考察ではなく、北イタリアの諸都市を拠点としてイタリア全土に勢力を拡大していったベネディクト会の改革派修族カッシーノ会に着目し、彼らの宗教的・芸術的取り組みに基づいて、地方の芸術文化を組み込んだ新たなルネサンス美術の参照枠を提示することを目指した。カッシーノ会に関しては、彼らのパトロネージによりルネサンスを彩る数々の名画が生み出されたにもかかわらず、未だ包括的な調査がなされず、イタリアの人文主義や北方の宗教改革とも密接に結びついた彼らの宗教性と美術との関わりは、十分に明らかにされていない。ゆえに、本研究では、15世紀後半から16世紀前半にかけて建設・改築が行われたカッシーノ会の各修道院建築について、特に、聖堂装飾に関する調査を行い、カッシーノ会という一定の環境において、中央/北部イタリアの地域性に基づく造形的特徴と表現様式上の差異や、図像プログラムのテーマを把握するとともに、地域性を越えた各作品や聖堂装飾の機能を、同会の意向・指針・改革派としての立場から照らし出すことを目指した。

3. 研究の方法

1. 北部/中部イタリアのカッシーノ会修道院建築を対象とした現地調査

15世紀から16世紀にかけて再建・改築が行われたエミリア・ロマーニャ、ヴェネト、ロンバルディア、トスカーナ地方の、カッシーノ会の各修道院建築を対象として現地調査を実施する。祭壇画、アプシス、ドーム、内陣、身廊壁面など内部装飾のために選択された主題・図像、画家、

制作年、技法、図案の考案者等の項目のもとに情報を整理し、基礎資料を作成する。この基礎資料に基づいて、同会による主題・図像選択の傾向性・志向性を明確にし、特に、聖堂装飾における図像的・様式的特徴を明らかにすることで、地域に由来する図像プログラムの特色と地域的差異を越えた共通点を浮き彫りにする。

II. ピアチェンツァ、サン・シスト聖堂の図像プログラムに関する考察

個別事例として、カッシーノ会に所属するピアチェンツァのサン・シスト修道院聖堂の装飾を対象とし、これまで殆ど等閑視されてきたベルナルディーノ・ザッケッティによる同聖堂の身廊フリーズおよび天井装飾(1517)の図像分析・銘文解読を試み、その図像プログラムのテーマを明確化する。その過程においては、同聖堂のラファエッロによる祭壇画《サン・シストの聖母》(1512)の従来の図像解釈を再考し、本祭壇画を含むサン・シスト聖堂における視覚的イメージと祈念及び典礼上の機能との関係を考察する。さらに、サン・シスト聖堂における実践を、上記 I の、修道会全体の芸術的取り組みの中に位置づけながら、装飾を極力排した他の地域のカッシーノ会聖堂との比較を行い、カッシーノ会が聖堂空間において美術作品に求めた一般的機能と地域的な特色とを検討する。

III. ポリローネ、サン・ベネデット修道院食堂の図像プログラムに関する考察

個別事例として、ポリローネのサン・ベネデット修道院の食堂装飾(c. 1514)を取り上げ、図像プログラムの考案者と推定されるカッシーノ会士グレゴリオ・コルテーゼと、彼に雇用された芸術家ジローラモ・ボンシニョーリおよびコレッジョとの関わりを検討する。このサン・ベネデット修道院の図像プログラムのテーマが、その後、ピアチェンツァのサン・シスト聖堂、パルマのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂のそれへといかに継承されたかを跡付け、16世紀前半におけるカッシーノ会の神学的関心とその変遷を考察する。併せて、同会の修道院建築の装飾における芸術的手法についても同様に比較し、その共通点と各修道院による特色を検討する。

IV. 磔刑のキリスト像に関する図像解釈学的考察

上記 I. の調査に基づき、16世紀半ばにティントレットがカッシーノ会の注文を受けて描いたヴェネツィア、サンティ・コスマ・エ・ダミアノ聖堂の祭壇画《キリストの磔刑》の造形的特徴を明らかにした後、ヴィテルボの改革派グループに属したミケランジェロの《十字架上のキリスト》との比較を通じて、ティントレットのキリスト像における強調点を明確にすると同時に、グレゴリオ・コルテーゼ、テオフィロ・フォレンゴ、イシドロ・クラリオ、ベネデット・ダ・マントヴァらの著作を参照しながら、ティントレットのキリスト像の図像的特徴をカッシーノ会の神学思想に照らして解釈する。これらの考察を軸として、16世紀前半のイタリアにおいて問題とされた恩恵と救済、義認と功績をめぐる神学的解釈との関係から、ティントレット/ミケランジェロのキリスト像の表現における特徴・様式が還元されうる思想的背景について検討する。

以上の I~IV の論点を総合し、北イタリアの修道院による芸術実践の、カッシーノ会全体の中での位置を検討しつつ、ルネサンス期の宗教美術における礼拝的/芸術的価値の相互的な関わり合いを捉えるための研究上の新たな枠組みを構築する。

4. 研究成果

本研究の成果として、包括的な研究が未だなされていないカッシーノ会修道院の美術について、

その様相の一面を明らかにするとともに、共通のパトロンであるカッシーノ会という一定のコンテキストのもとで同会に雇用された芸術家たちの手法や創意を考察したことにより、これまで「周縁」に位置づけられてきた芸術家や美術作品に関して、その評価を刷新することができた。以下に、年次ごとの研究成果を報告する。

本研究の初年度である平成 30 年度は、まず、ピアチェンツァのサン・シスト修道院聖堂を対象として、エミリア地方出身の画家ベルナルディーノ・ザッケッティによる壁面・天井装飾の現地調査を実施、それに基づき図像・銘文解釈を行った。このザッケッティによる装飾に関しては、これまで詳細な研究が行われていない状況であったため、現地で、聖堂壁面を装飾する図像を細部まで確認し、画像データを作成する作業から着手した。このデータベースを基礎として、聖堂建築の各部分に選択された図像を分析し、伝統的なキリスト教図像との照合を試みた結果、西交差廊の装飾がパウロ書簡『ヘブライ人への手紙』第 9 章を典拠とすることが明らかとなり、同聖堂全体を貫く図像プログラムは、「キリストによる贖罪」をテーマとする可能性を浮かび上がった。この仮説のもと、主祭壇に設置されたラファエッロの《サン・シストの聖母》との関係を考察し、いかに本祭壇画が上述のサン・シスト聖堂の図像プログラムに組み込まれ、そのプログラムに従った意味と機能を発揮したかという観点から、新たな作品解釈を提案するとともに、サン・シスト聖堂において視覚的イメージが果たした役割を提示した。この考察の内容は、2018 年 5 月に行われた美術史学会全国大会において発表し、『美術史』(美術史學會編)第 187 冊に掲載された。

令和元年度は、ロンバルディア、エミリア・ロマーニャ、ヴェネト地方のカッシーノ会の各修道院建築及び関連施設の調査を実施した。これと並行して文献資料の精査を行い、まず、同会に属するヴェネツィア、サンティ・コスマ・エ・ダミアーノ修道院のためにティントレットが描いた祭壇画《キリストの磔刑》(c. 1546-48 年)について、ヴィテルボの改革派グループと関わりのあったミケランジェロの《十字架上のキリスト》(1540 年代)との比較からティントレットのキリスト像の図像的特徴を照射するとともに、カッシーノ会独自の救済論との関わりを指摘した。本考察の過程は、2019 年 7 月に開催された名古屋大学文学研究科 CHT 主催一般公開セミナーにおいて発表した。また、ポリローネのサン・ベネデット修道院の食堂装飾についても考察を進め、活動初期のコレッジョのフレスコ画(c. 1514)とジローラモ・ボンシニョーリの油彩画《最後の晚餐》(c. 1514)の合作による壁画を対象として、注文主であるカッシーノ会士グレゴリオ・コルテーゼの人文主義思想との関連、レオナルド・ダ・ヴィンチやラファエッロの「代理」としての地方画家の役割、サン・ベネデット修道院とローマ教皇庁との関係などを検討し、16 世紀初頭の北イタリア地方における古典主義受容の様相の一端を明らかにした。本考察の内容は、2021 年 3 月刊行された論集『古典主義再考』(木俣元一/松井裕美編)に公開した。

令和二年度は、新型コロナウイルス感染症の渡航制限により、北イタリアの事例との比較対象として当初予定していた、トスカーナ地方におけるカッシーノ会修道院を対象とした現地調査が実施できなかったため、計画を変更し、それまでの現地調査で得た情報を整理・分析するという作業が中心となった(本研究は、令和二年度が最終年度であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により大幅に遅れが生じ、補助事業期間の一年間の延長を申請した)。カッシーノ会に関する関心は、西欧で特に近年高まりを見せ、そのネットワークの実態やパトロネージの諸相についても着目されつつある。前年度にはポリローネのサン・ベネデット修道院を会場として 16 世

紀のこの地域の芸術文化に焦点を当てた展覧会が開催されたが、こうした研究動向が国内では殆ど知られていないため、2020年発行の東京芸術大学研究紀要『ASPECTS』に、ルネサンス美術の最新の研究動向として、本展覧会の内容およびを紹介し、それを踏まえた本研究の方向性を報告した。また、前年度に行ったカッシーノ会のキリスト像に関する考察を踏まえ、2015年度に公開した日本語論文を加筆修正し、英語論文「Correggio's Second Coming in San Giovanni Evangelista in Parma: Transfiguration and Resurrection, and Divinity and Humanity」(*Aesthetics*, 2021)として公開した。

最終年度となる令和三年度は、無装飾・無彩色を特色とするカッシーノ会聖堂の基本的な装飾の特徴に着目し、そうした芸術的志向性と、救済、恩恵、義認、功績に関する彼らの神学的見解との関連を検討した。さらにこの聖堂装飾に見られる傾向に照らして、前年度までに考察してきた、例外的にフレスコ画を施した北イタリアに位置するポリローネのサン・ベネデット修道院、ピアチェンツァのサン・シスト聖堂、パルマのサン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂における芸術実践を捉えることで、抽象的／具象的なイメージによってもたらされる観者の視覚体験をそれぞれ跡付け、カッシーノ会の聖堂空間において美術作品が果たした役割を浮き彫りにした。カッシーノ会の美術と神学思想に関するここまでの研究を総合し、コレッジョをはじめ、ペルジーノ、ボンシニョーリ、ザッケッティ、ラファエッロらとの関係から明らかとなったカッシーノ会によるパトロネージの具体的な様相や、各作品と同会における修道実践や神学的関心との関連を整理して、2022年2月、単著『コレッジョの天井画：北イタリアにおけるルネサンス美術と宗教改革』において公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 百合草真理子 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 (展覧会評)ポリローネのチンクエチェント：コレッジョからジュリオ・ロマーノへ | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Aspects of Problems in Western Art History | 6. 最初と最後の頁 123-129 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Mariko Yurikusa | 4. 巻 23/24 |
| 2. 論文標題 Correggio's Second Coming in San Giovanni Evangelista in Parma: Transfiguration and Resurrection, and Divinity and Humanity | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Aesthetics | 6. 最初と最後の頁 76-88 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 百合草真理子 | 4. 巻 187 |
| 2. 論文標題 ラファエッロ作《サン・シストの聖母》に関する一考察 ピアチェンツァ、サン・シスト聖堂の天井・壁面装飾を視野に入れて | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 美術史 | 6. 最初と最後の頁 54-71 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 百合草真理子 |
| 2. 発表標題 ミケランジェロの芸術における古代美とキリスト教信仰 |
| 3. 学会等名 名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター主催一般公開セミナー |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 YURIKUSA Mariko |
| 2. 発表標題 Ruskin and Sixteenth-Century Italian Painting |
| 3. 学会等名 Colloque international: Ruskin et la France (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 百花草真理子 |
| 2. 発表標題 ラファエッロ作《サン・シストの聖母》に関する一考察 ピアチェンツァ、サン・シスト聖堂の壁面装飾を視野に入れて |
| 3. 学会等名 第71回美術史学会全国大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 百花草真理子 |
| 2. 発表標題 ルネサンス芸術家による聖なるものの表象 |
| 3. 学会等名 名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター主催セミナー |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 百花草真理子 |
| 2. 発表標題 16世紀初頭の北イタリアにおけるカトリック改革の動向と古典主義 |
| 3. 学会等名 名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター主催シンポジウム |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 YURIKUSA Mariko |
| 2. 発表標題 The Reception of the Italian Renaissance Paintings and Its Historical and Cultural Context in the Modern Western Europe |
| 3. 学会等名 Humanités - Identités. Les humanités et la construction d' identités culturelles collectives au XIXe et XXe siècle, Palais universitaire de Strasbourg (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|---------------------------------|
| 1. 著者名 木俣元一、松井裕美(編)、担当：百合草真理子「一六世紀初頭の北イタリアにおける古典主義の受容に関する一考察」 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 中央公論美術出版 | 5. 総ページ数 480 (範囲 pp.275-302) |
| 3. 書名 古典主義再考 西洋美術史における「古典」の創出 | |

| | |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名 百合草真理子 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 三元社 | 5. 総ページ数 324 |
| 3. 書名 コレッジョの天井画 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

| | | | |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|
| 6. 研究組織 | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|